

# 田舎暮らしを楽しむ

(19)

佐藤 彰啓



菜園の堆肥づくりに必要なコンポスト

「早朝、畑で真つ赤なトマトを口にほお張ると、もう無上の喜び：」。千葉県鴨川市に移り住んだTさん(64)は、今年ようやく畑らしくなった庭先で収穫の喜びを語る。

四年前、山あいの土地を購入したが、スコップを入れたところ、こぶし大の石がゴロゴロと出てくる。桑畑だったというが、とても野菜づくりには向かない。「猛暑の日も石ころを掘り出す作業に追われ、昔の開拓農家の気持ちがあわかった」。百坪(二坪は三・三平方メートル)余の土地

## 肥沃な土地に育てる

### 土に親しむ(上)

を整地するのに一年を要したという。菜園には、もちろん畑として耕されてきた肥沃(ひよく)な土地がよいが、必ずしもそうした土地が手に入るとは限らない。雑木林であったり、スキの原野であったりする場合も多い。しかし、心配無用。荒れた土地もTさんのような開拓者精神で耕し、堆肥(たいひ)や有機肥料を入れると、数年で見違えるほどよい畑に変身する。

Tさんは冬になると軽トラック

で近くの雑木林に出かけ、林道に吹きだまつた落ち葉をくまでもかき集め、堆肥作りに精を出す。堆肥は、近くの精米所から米ぬかを、酪農家から牛ふんを分けてもらい、落ち葉とともに交互に踏み込んで作る。一年置いた堆肥を整地した畑にすき込む。堆肥作りを続けて、今年で三年目である。

自家菜園では野菜が虫に少々食われても無農薬でありたい。健康な野菜は有機質をたっぷり含んだ肥沃な土に育つ。有機質を含んだ土には無数の微生物、バクテリア、小さな生き物が生息し、そのエネルギーで地温も高い。それはちょうど作物にとって掛け布団のような役割を果たし、病気や冷害にも強い。

いい土にはミミズがいる。好物は有機質を含んだ肥沃な土で、土を飲み込んで排出し、土壌改良をしてくれる。化学肥料や農薬は、土の中の微生物まで殺してしまう。生き物がすんでいるかどうかは、土のよしあしのバロメーター。ミミズのいる畑を作ろう。田舎暮らしは「土づくり」から始まる。(ふるさと情報館代表)